

- 1 教育事業名 「無人島アドベンチャーキャンプ 2017」  
～自然、仲間、自分と向かい合う夏～
- 2 ね ら い 「不便」「不足」「不自由」な厳しい生活環境の中で、仲間達と助け合いながら対峙する困難を乗り越えることで、協力することの大切さを学ぶことができる。また、無人島で「生きる」技能を学び、その実践を通して自信を持たせることで精神的な自立を促し、同時に人間の力が及ばない自然の偉大さに気付かせることを目的とする。
- 3 期 日 平成 29 年 7 月 24 日（月）～7 月 30 日（日） 6 泊 7 日
- 4 場 所 国立沖縄青少年交流の家 儀志布島 沖縄県立糸満青少年の家
- 5 募集定員 24 名
- 6 参加人数 24 名
- 7 参加者内訳 小学生 12 名、中学生 12 名（男子 12 名、女子 12 名）  
（県内 21 名、県外 3 名）
- 8 講 師 ・大城 敏 氏（パドリングガイド漕店代表）  
・東江 宗典 氏（潮花キッズクラブ代表）  
・比嘉 康裕 氏（ホテル日航アリビラ）  
・森 有紀子 氏（読谷村観光協会）  
・浅野 優香 氏（沖縄県立名護青少年の家）

9 実施プログラム

| 月 日(曜)   | 活動内容                            |  |                                 | 宿泊場所        |
|----------|---------------------------------|--|---------------------------------|-------------|
|          | 午前                              | 午後   | 日没後                             |             |
| 7月24日(月) | フェリーにて渡嘉敷港へ移動<br>開講式            | スノーケリング練習<br>装備品パッキング<br>野外炊事研修                  | 班での話し合い<br>ビバークテント設営研修<br>ふりかえり | キャンプ場       |
| 7月25日(火) | 儀志布島へ<br>大型カヌーにて移動              | 儀志布島を知る<br>生活基盤づくり                               | ボンファイヤー<br>ふりかえり<br>無人島での目標設定   | 儀志布島        |
| 7月26日(水) | 班別活動<br>漁労活動                    | 班別活動<br>漁労活動                                     | ボンファイヤー<br>ふりかえり                | 儀志布島        |
| 7月27日(木) | 班別活動<br>漁労活動                    | 班別活動<br>漁労活動                                     | ソロ活動                            | 儀志布島        |
| 7月28日(金) | 機材撤収<br>移動(船)<br>機材片付け<br>アンケート | フェリーにて泊港へ移動<br>沖縄県立糸満青少年の家<br>(沖縄本島)へ移動<br>テント設営 | 班別活動<br>野外炊事<br>ふりかえり           | 糸満<br>青少年の家 |
| 7月29日(土) | 班別活動<br>野外炊事<br>報告会準備           | 班別活動<br>野外炊事<br>分かち合いの集い準備                       | 野外炊事<br>分かち合いの集い<br>ふりかえり       | 糸満<br>青少年の家 |
| 7月30日(日) | 野外炊事<br>テント撤収<br>報告会準備          | 野外炊事<br>報告会会場へ移動<br>報告会<br>～解散～                  |                                 |             |

※儀志布島で5泊6日のキャンプを予定していたが、台風接近のため28日に無人島キャンプ撤収。沖縄本島に渡り沖縄県立糸満青少年の家でのキャンプ（2泊3日）に変更。

10 事業の様子



大型カヌーで無人島をめざす



食べるために火を起こす



貴重な雨水をみんなで集める



ブルーシートを利用したビバークテント



釣りのポイントへ向けて進む



班員輪になったの食事



ボンファイヤーでキャンプをふりかえる



報告会に向けた班の話し合い

## 11 エピソード（アンケート・参加者の感想）

- ・重い水くみを体験したことで、水の一滴一滴にありがたみを感じた。
- ・質素なご飯だったけど、協力して作り、笑顔で食べる食事は最高においしかった。
- ・無人島で生活していくために、班全員で力を合わせて頑張ることができ、色々な面で成長できた。
- ・つらさの中にも楽しさやうれしさがあって、日常生活のありがたみが分かった。
- ・水や電気、母がしてくれる家事、家族の大切さを知った。
- ・互いに知恵を出し合い、支え合うことで乗り越えられたことがいっぱいあった。
- ・台風の影響で無人島を離れるのは寂しかったけど、最高の仲間と出会えたので一生心に残る無人島キャンプだった。

## 12 担当者所見

### （1）成果

- ・「不便」「不足」「不自由」をコンセプトに事業内容を見直し、「困難を乗り越える体験」を重視したプログラムとして募集を行ったことで、厳しいキャンプに臨むという各参加者の心構えができており、全日程を通して意欲的に参加することができた。
- ・仲間と助け合いながら困難を乗り越えていく体験を通して信頼関係を深め、互いに意見を出し合いながらより良い無人島生活づくりに励んだ。
- ・無人島という厳しい環境での共同生活を通して、日常生活の便利さや家族のありがたみについて気付くことができた。
- ・主カウンセラーから各班参加者への事前連絡（電話）を行ったことにより、参加者の緊張緩和、スタッフと参加者間の円滑なコミュニケーションにつながった。
- ・各班に女性カウンセラーを配置したことで、女子児童、女子生徒への適切な配慮が行われた。
- ・プログラムの精選を行い、新たな活動を取り入れたことで班活動の時間が増え、共働の体験を通して互いに協力する事の大切さを学ぶことができた。
- ・食材の精選を行ったことで漁労活動の必要性が高まり、釣りや貝の採集等、意欲的な活動につながった。
- ・海水を用いた調理用の塩作りを通して班内のコミュニケーションが図られ、作った塩と釣果の物々交換が行われる等、グループ間の交流にもつながった。
- ・時計を所持しない生活の中、太陽高度や潮の干満等の自然の事象、定期船往来のタイミング等を目安にして班の生活リズムをつくることができた。
- ・台風接近による海上時化により、後半は糸満青少年の家でのキャンプとなったが、無人島で使用した装備、食料を引き続き活用したことで、参加者の活動意欲の持続につながり、無人島生活で得た知識・技能を活かしながらキャンプを継続することができた。

### （2）課題

- ・事前の実地研修等を行い、各カウンセラーの持つ技術の共有や実際の指導に関する共通理解を図る場が必要である。
- ・火起こしに関わる装備の改善を行い、野外炊飯の時間短縮を図ることで、さらなる班活動の時間確保につなげたい。
- ・装備品の活用力を高めるため、その精選、各班によるパッキングを行ったが、装備品紛失が各班共通の課題として挙げられ、定物定置の指導強化を図る必要がある。
- ・カウンセラーや施設ボランティア等、スタッフの確保と育成。